

日の出を待つ海たちよ

作
折田

登場人物

ゼロゼロ
れいれい(深海) 飛希(とまれ)
衆合クラスの天使？

ゼロロク
むーさん(三魚) 朱澄(すすむ)
衆合クラスの天使？

ゼロキユウ
くっちん(沖洋) 雨石(うごく)
衆合クラスの天使？

ゼロイチ
いち(濱江) 一祈留(いきる)
衆合クラスの天使？

先生(せんせい)
衆合クラスの先生

黒縄(こくじょう)
黒縄クラスの先生

なっちゃん(なつちゃん)
黒縄クラスの天使？

飛希 母 主婦

朱澄 母 主婦

雨石 母 主婦

一祈留 母 主婦

誘拐犯
おじさん
身代金目的で朱澄を誘拐する男
ただの通りすがりのおじさん

0

暗闇。そのなかに、微かな光が灯る。

どこか遠くから産声が聞こえる。

産声は光とともに消える。

1

部屋も、椅子も、机も、黒板すらも真っ白な空間。ガッコウのとある教室。

ぬいぐるみみの日本人形(ジアイーノ)を持ったくっちゃん、頭にエンジェリング(天使の輪を模したカチューシャ)を着けた、れいれい、むーさん、いちの3人と対峙している。

くっちゃん

「さあ、はやくお前たちのエンジェリングを寄越すのだ！」

れいれい

「渡しましようよ！ このままだとジアイーノが……！」

いち

「ダメだよ。あいつはもう、97人の同胞からエンジェリングを奪ってるのよ！」

この辺りで先生が画面に登場。遠くから4人の様子を見ている。

むーさん

「私たちのエンジェリングまで奪われたりしたら、宇宙をも生み出す超絶奇跡はワルイーノのモノになっちゃうわよお！」

くっちゃん

「ええい、うるさいうるさい！ このジアイーノが死んでもいいのか！」

3人

「ジアイーノ！」

くっちゃん

「ハハハハハ！ ワルイーノ様に逆らう奴はこうなるのだ！」

くっちゃん(ワルイーノ)、日本人形(ジアイーノ)を床に叩きつけ、踏みつける素振り。

先生、いちのエンジェリングを背後から素早く気づかれないように奪う。

3人

「ジアイーノ……！」

と、膝から崩れ落ち、それぞれ嗚咽を漏らしている。

先生

「最近の子供は、ドーナッツを頭につけて遊ぶんですねえ。」

いち、自分の頭にエンジェリングがないことに気がつき。

いち

「先生！ 返してください。それはドーナツじゃなくて、奇跡の源、エンジェ

リングです！」

先生

「ボンデ」

いち

「リングじゃなくて、エンジェリング！」

先生

「それは失礼いたしました。」

先生、いちにエンジェリングを渡し、手を叩く。

先生

「はいはい、みなさん。」

2人

「ジアイーノ！」

くっちゃん

「ぼかな、これは影武者だというのか!？」

先生

「誰がジアイーノですか。あら、その人形確か、黒縄先生の……。」

れいれい

「ギクリ。」

先生

「ウフフ。あとでしっかりお説教ですね。」

れいれい

「そんな殺生な。」

くっちゃん

「おいおい、黒縄先生のだったのかよ。オレ思いつきり投げつけちゃったじゃん。」

先生

「全く。ボンデリングなんて頭につけて。天使ごっこのもりですか？」

むーさん

「そうよお。私たちは強大な敵、ワルイーノと戦う美少女天使なの。」

先生

「へえ、美少女。(くっちゃんから人形を受け取りながら)天使ごっこをする天使

とは。先生、はじめて聞きました。」

いち

「え、でも人間だって人間ごっこするよね？ 女の子がさ、男の子に向かって

人参を一本渡すの。これがあなたの晩御飯よって。」

れいれい

「いち、それ人間ごっこやない。おままごつや。」

先生

「人間観察、とても良いことですね。お勉強さえこなしていれば、先生、文句

はありませんよ。」

くっちゃん

「こなしてるこなしてる。」

いち

「それより先生、何か用ですか？ あ、お勉強？」

むーさん

「お勉強なら私、お遣いがいいわぁ。」

れいれい

「掃除以外なら何でもいい。」

先生

「キャンキャンと子犬のようにまあ。(咳払い)はいはい、みなさん。もう宜しいですね。校長からの、お言葉です。」

4人、校長という言葉を聞き、「きゃー！」だの「校長先生！」などと小さく騒ぎながら姿勢を正す。

先生

「(どこからかベルを取り出し鳴らす)神のお言葉を！」

4人 「拝聴！」

先生 「日々の勉強、まことにご苦労。校長である！」

れいれい 「生徒である！」

くっちゃん 「黙って聞け。」

先生 「さて、イチゼロ。先ほど、お前の母親だった者の生命活動の停止が確認された。これにて、衆合クラス全員の親だった者の生命活動が停止したことになる。」

顔を見合わせる4人。

先生、そんな4人を満足そうに見つめる。

先生 「おめでとう私の天使たち。卒業です。」

先生、ひどく穏やかな顔。

いち 「卒業って何？」

2 先生が去ったあとの教室。

それぞれ自分の席に座り、ぼんやりと遠くを眺めている。

れいれい 「卒業か。」

むーさん 「卒業ねえ。」

くっちゃん 「卒業な。」

いち 「卒業……。」

4人、お互いの顔を見る。

いち 「っていうか、みんなも知らなかったでしょ。」

れいれい 「エへ。」

むーさん 「まあね。」

くっちゃん 「教えられてないもんをどう知るんだよ。ああいうときは、黙って説明を待つもんなの。」

いち 「へいへい。失礼しやした。」

くっちゃん 「おいこら。」

むーさん 「やだあ。くっちゃんったら怒りっぼいんだから。」

くっちゃん 「黙れオカマ。」

むーさん 「ひどい。」
れいれい 「あー、今のはひどいんだー。」
いち 「女心がわからないのよ、くっちゃんには。大丈夫？ 傷ついたよね。」
むーさん 「平気よ。女は男に傷付けられながら自分を磨いていくものだもの。」
れいれい 「語るなオカマ。」
むーさん 「ひどい。」
いち 「それより先生の言っていた卒業課題なんだけどさ。」
くっちゃん 「ムズくね？」
いち 「それ。」
れいれい 「え、そうなの？」
むーさん 「ノーテンキなんだから。」
くっちゃん 「れいれい、先生の言ってたこと、覚えてるか？」
れいれい 「あんまり。」
くっちゃん 「おいこら。」

先生、静かに登場する。

くっちゃん 「(先生の真似をして)あなたたちがこの学校への入学と同時に手放したものを、取り戻して、また手放す。たった。」
先生 「それだけのことですよ。」
れいれい 「先生！」
先生 「ごきげんよう皆さん。今日はしないんですか？ 美少女ボンディングごっこ。」
むーさん 「美少女天使！」
先生 「美少女。」
いち 「先生。何か用事ですか？」
先生 「もちろん。ゼロゼロ、黒縄先生が呼んでいますよ。」
れいれい 「ギクリ。ドッキリ。」
先生 「大丈夫。とーっても、優しい、笑顔で。待っていらっしやいますから。」
れいれい 「ハラハラ。うっ(胸を押さえ)チーン。」
むーさん 「先生！ れいれいが恐怖のあまり心臓麻痺に！」
いち 「もう……手遅れです……！」
くっちゃん 「くそっ、何たってこんなことに！ ちくしょう！」
先生 「早く行きなさい。」
れいれい 「はい。」

れいれい、教室から出ていく。3人、れいれいの背中に「れいれい」や「忘れないからね」などの言葉をかけている。

先生 「あなたたちはお勉強です。」

くっちゃん 「そんな気がしたんだよな。」

いち 「お迎え？」

先生 「お掃除。」

むーさん 「そんな気がしたのよね。」

先生 「ゼロキユウとゼロロクは職員室。」

いち 「私は？」

先生 「河原に行って石をやすりで磨く作業を。イチゼロ、あなた得意でしょう。」

いち 「得意とかある？ あの作業。」

むーさん 「あら、いちの磨いた石は積みやすいつて評判よ。」

くっちゃん 「誰から聞いたんだよ。」

むーさん 「可愛いボーヤから。」

くっちゃん 「妙な寒気が。」

先生 「さ、お勉強お勉強。」

先生、3人を連れて教室から退場。

河原。

なっちゃんが座っている。なっちゃんは足元の石を見つめたり、泣きながら石を積む子供たちを眺めたりしている。

いち、やすりと磨いた石を入れる箱を抱え登場。泣きながら石を積む子供たちをチラリと見る。足元にある適当な石から磨こうと箱を置き、なっちゃんに気がつく。

いち 「どうも。」

なっちゃん 「どうも。」

いち 「あ、もしかして、あなたも石を磨く……？」

なっちゃん 「え？」

いち 「なあんだ、お勉強じゃないの。」

なっちゃん 「私のクラスは、今日はもうお勉強、終わったから。」

いち 「へえ。何だったの？」

なっちゃん 「お迎え。」

いち 「いいなあ。石磨くより、お迎えの方が好きなんだよね。あ、ひねくれた人の

お迎えは嫌いだけど。」

なっちゃん、微笑む。

いち 「どんな人だった？」

なっちゃん 「子供だったの。」

いち 「そっか。じゃ、もうすぐここに来るんだろうね。」

なっちゃん 「ううん。来ないと思うわ。」

いち 「なんで？」

なっちゃん 「その子の両親、先にこっちへ来てるんだって。だからその子も、ここで石を積む必要はないんだって。」

いち 「そっか。羨ましいな。」

なっちゃん 「どうして？」

いち 「あれ、羨ましくない？ だってさあ、ひどいもんだったじゃん？ 高く積ん

では崩され、綺麗に積んでは崩されだよ。最高傑作のお城を崩されたときの恨み、私まだ覚えてるんだから……。」

なっちゃん 「執念深さが半端じゃないね。」

いち 「黒縄先生。」

なっちゃん 「恨む相手は選んだほうがいいと思うよ。」

いち 「いいの。黒縄先生なんて怖くないんだから。」

なっちゃん 「震えてるけど。」

いち 「武者震い！」

いち、磨いた石を箱に強く投げ入れる。

なっちゃん 「手伝おうか。」

いち 「いいよ。やすり一つしかないんだ。」

なっちゃん 「そう。」

ガラガラ、と石が崩れる音。2人、音の方向を見る。

いち 「あーあ。」

なっちゃん 「あの子、よく崩されるんだよね。誰よりもはやく高く積むから、よく崩されるの。」

いち 「知り合い？」

なっちゃん 「まさか。私、時々ここに来るから。」

いち 「1人で？」

なっちゃん 「うん。あなたたちは、よく4人で遊んでるよね。」

いち 「お騒がせしております。」

なっちゃん 「……私ほね、なんて言うんだろう。ずっと蓋を探してるの。」

いち 「ふた？」

なっちゃん 「そう、蓋。」

いち 「なんの？」

なっちゃん 「それがわからないの。」

いち 「ふうん……？」

なっちゃん 「あ、蓋がないなって、感じるの。何の蓋かはわからないけど、ああ、蓋がないっていう、喪失感だけがここにあるの(と、胸を撫でる)」

いち 「それが、河原に来たら埋まるの？」

なっちゃん 「そういう訳じゃないんだけど、あるとしたら、ここなんじゃないかって。」

いち 「(少し考えてから)石と石との隙間とか。」

なっちゃん 「川のなかとか。」

いち 「土のなかとか。」

なっちゃん 「子供の涙のなかとか。」

いち 「お、詩人だねえ。」

なっちゃん、照れ臭そうに笑う。

いち、磨き終えた石を入れ、箱のなかを確認する。

なっちゃん 「あなたたちのクラス、もうすぐ卒業なんだって？」

いち 「まあね。でも卒業課題が難しくって困ってるんだ。課題こなせなかったらどうなるんだろう。一生お勉強させられるのかな。……それは嫌だな。」

なっちゃん 「課題って、記憶の？」

いち 「記憶？」

なっちゃん 「まだ人間だった頃の記憶を取り戻して、先生に渡すんでしょう？」

いち 「人間だった頃の……？」

なっちゃん 「うん。先生達の会話が少し聞こえてきただけだから、私も詳しくは知らないんだけど。」

いち 「なにそれ。どうやって取り戻すの？」

なっちゃん 「さあ。まだ人間だった頃の……。」

いち 「人間だった頃の……。」

なっちゃん 「人間だった頃の。」

いち 「記憶。」

教室。

それぞれの席につき、神妙な顔で腕を組む4人。

れいれい

「記憶か。」

むーさん

「記憶ねえ。」

くっちん

「記憶な。」

いち

「記憶……。」

4人、お互いの顔を見る。

いち

「覚えてる天使いる？」

くっちん

「いるわけないだろ。」

むーさん

「記憶を渡すことが入学の条件なんだもの。」

れいれい

「渡す？ 奪われたの間違いじゃないの？」

いち

「言ってる。」

むーさん

「やだあ。」

くっちん

「つまり奪い返せってことか？」

れいれい

「誰から。」

くっちん

「そりゃ。………校長？」

いち

「ダメだ。」

れいれい

「勝てる気がしない。」

むーさん

「やだあ。」

先生、静かに登場。4人をじっと見ているが、4人は先生に気がつかない。

くっちん

「4人で力を合わせるんだよ。いいか、まずむーさんが校長の気を引く。で、

むーさん

オレが背後から忍び寄り、後頭部をガン！ っと殴る。」

くっちん

「やだあ。」

れいれい

「よろめいたところを透かさず、いちとれいれいが追い討ちをかける。どうだ、

この作戦。」

れいれい

「私たちはどこに隠れてるの？」

くっちん

「天井に張り付いて。」

いち

「ホラーじゃん。」

れいれい

「スカートめくれるから嫌。」

くっちん

「スカートなんてお前、気にしてる場合かよ。あの校長だぞ。あの校長なんだ

ぞれいいい。」

先生 「どの校長ですか。」

くっちゃん 「うわあ！」

むーさん 「あ、先生。」

先生 「恐れ知らずな天使たちですね。いくら先生でも天罰からは守ってあげられませんよ。」

いち 「天罰って下すの私たちなんだけど。」

れいれい 「実際下したことはないけど。」

むーさん 「下すっていうのも変よね。ここが下なんだから。」

先生 「はいはい、お喋りは結構です。今日のお勉強はお迎えですからね、気を引き締めて行きましょう。」

いち 「やった。」

れいれい 「よし来た。」

むーさん 「うんとオシャレして行きましょうね、くっちゃん。」

くっちゃん 「そうだな。って誰が。」

先生 「やる気に満ちているようで先生も嬉しいですよ。他のお勉強もこうなら苦労しないんですけどね。」

れいれい 「やだな。私達いつもやる気しかありませんよ。」

むーさん 「ホントホント。」

先生 「ま、さすが私の天使たち。今日のお勉強も頑張りましたよ。」

4人 「はい！」

先生 「ちなみに明日のお勉強はお掃除です。」

4人 「はい……。」

先生、4人を連れて教室から退場。

現世。

とあるビルの屋上。そんなに高くはない、6階くらい。

れいれい、画面に登場。下に何か(妊婦)を見つけたらしく「あ」などと声をあげながらフェンス越しに覗き込む。

3人がれいれいの元にくる。

むーさん 「どうしたの？」

れいれい 「ほら。」

くっちゃん 「何だ？」

いち 「あ、妊婦さんだ。」

むーさん 「あら、ホント。」

くっちゃん 「おーおー。美人じゃん。」

むーさん 「男ってやだわ。」

くっちゃん 「お前もな。」

いち 「妊娠ってさあ。」

れいれい 「うん。」

いち 「奇跡だよね。」

むーさん 「ええ。」

くっちゃん 「そうだなあ。」

れいれい 「ねえ、生まれる頃にみんなで見に来ようよ。」

くっちゃん 「お。」

むーさん 「いいわね。」

いち 「それまでに卒業してなきゃだけど。」

れいれい 「あ、ホントだ。」

むーさん 「どうかしら。」

くっちゃん 「さあな。」

いち 「無事に生まれるといいね。」

くっちゃん 「そりゃあ大丈夫だろ。」

れいれい 「なんで？」

くっちゃん 「何たって、天使に見守られた子だからな。」

むーさん 「ウッフ、そうね。」

先生が登場。

先生 「さ、お迎えに上がりますよ。」

4人 「はい、先生。」

先生に4人が続く。

その途中、れいれいが何かに気がついたように振り返り、立ち止まる。

いち、れいれいの様子に気がつく。

むーさん、くっちゃんは気づかず、立ち止まることなく先生と消える。

いち 「どうしたの？」

れいれい 「何か聞こえたの。」

いち、耳を澄ますが、何も聞こえない。

いち 「何が聞こえたの？」

れいれい 「……赤ちゃんの……。」

いち 「赤ちゃんの？」

れいれい 「赤ちゃんの、泣き声が。」

4 飛希―過去。

病院の廊下。

車椅子に乗っている飛希(れいれい)、窓を見つめている。

飛希を探しにきた母親が登場。飛希を見つけ、ひとまず安心する。

飛希母 「こんなところにいたの。」

飛希母、飛希に駆け寄り、一緒に窓の外を見つめる。

飛希が見つめる先には、ランドセルを背負った学校帰りの子供が楽しそうに歩いている。

飛希母 「飛希。」

飛希 「お母さん。」

飛希母 「なあに。」

飛希 「戻ろう。」

飛希母 「そうね。」

飛希母、車椅子を押し病室に戻ろうとするが途中で立ち止まる。

飛希母 「飛希。」

飛希 「なあに。」

飛希母 「お母さん、飛希の側にずっといるからね。」

飛希 「うん。」

飛希母 「飛希。」

飛希 「なあに。」

飛希母 「どうしても苦しかったら、辛かったら、言って良いのよ。」

飛希 「飛希、大丈夫だよ。」

飛希母 「お母さん、ずっと一緒にいるからね。」

飛希 「うん。」

飛希と飛希母の側を、2人の子供(朱澄、一祈留)が駆けていく。
そのうしろ母親2人が怒りながら歩いてくる。

朱澄母

「こら、朱澄！ 病院で走るんじゃないよ！」

一祈留母

「もう、一祈留ったら。すみません三魚さん」

飛希母、子供の駆けていった方向をしばらく見つめている。飛希は、子供の駆けていった方向と自分の母親を交互に見つめている。

飛希

「お母さん。」

飛希母

「なあに。」

飛希

「あのね、飛希のお身体、元気じゃなくてごめんね。」

飛希母

「……。」

「でもね飛希ね、元気だから大丈夫なんだよ。だからね、お母さんもね、元気になってくれる？」

飛希母

「もちろんよ。お母さんは、いつも元気よ。」

飛希

「本当？」

飛希母

「本当。」

飛希

「飛希が悪いことしたら、いっぱい怒れる？」

飛希母

「怒る怒る。」

飛希

「本当？」

飛希母

「本当。」

飛希

「お母さん。」

飛希母

「なあに。」

飛希

「あのね、飛希ね。」

飛希母

「うん。」

飛希

「お母さんが悪いことしたらね。」

飛希母

「うん。」

飛希

「飛希が怒るからね、だからね。」

飛希母

「……うん。」

飛希

「悪いことしちゃだめだよ。」

飛希母

「うん。」

飛希

「戻ろう。」

飛希母

「そうね。」

飛希、飛希母、部屋へと戻っていく。
間。

足音や人の声が慌ただしく聞こえてくる。

飛希母が、飛希を必死で呼び掛ける声が聞こえる。
心電図モニターの音が響く。

飛希母
「飛希！ 飛希！」

何度も飛希の名前を呼ぶ母親。

5

教室。

人形(ジアイーノ)を持ったくっちゃんが駆け足で登場。頭にエンジェリングを着けた3人があとを追いやってくる。

くっちゃん
「はっはっは！ このジアイーノさえいなくなれば、このスゲールイーノ様が！ この世界の支配者となるのだ！」

れいれい
「くっ……！ こうなったら、エンジェリングの力を使うしかないよ！」
「ダメだよ、それだとジアイーノまで巻き込んだじゃう！」

この辺りで先生がひょっこり登場。遠くから4人の様子を見ている。

むーさん
「でもでもでもお。このままだとジアイーノ、どっちにしろ殺されちゃうわよお！」

いち
「だからって私たちの手でジアイーノを殺せるわけじゃないじゃない！」

くっちゃん
「ええい、うるさいうるさい！ このジアイーノが死んでもいいのか！」

3人
「ジアイーノ！」

くっちゃん
「ハハハハハ！ オレ様に逆らう奴はこうなるのだ！」

くっちゃん、ジアイーノの人形を床に叩きつけ、踏みつけようとする。

れいれい
「やめて！ 命を粗末にしないで！」

くっちゃん、れいれいの叫びに驚き、ピタリと止まる。
いち、むーさんも驚き、れいれいを見つめる。

むーさん
「れいれい、どうかしたの？」

れいれい
くっちゃん
「あ……。ううん、何でもないの。ごめん。その、続けよ。気にしないで。」

「変だぞ。何かあったんだっただけだよ。」

れいれい
「何でもないの。」

いち
「本当に?」

れいれい
「う、うん。本当に。」

先生
「あらあ。また美少女ボンディングごっこですか?(たった今来たかのように振る舞って)」

くっちゃん
「先生。」

むーさん
「美少女天使!」

先生
「美少女。」

先生、れいれいを見る。

先生
「ゼロゼロ、どうかしましたか?」

れいれい
「なんにも。」

先生
「そうですか。それなら結構。」

むーさん
「先生。何かご用事?」

先生
「ええ。私の天使たちの、卒業課題の進捗具合は、どうだろうと思ひまして。」

れいれいがビクリと反応するが、先生以外気づいた様子はない。

くっちゃん
「進捗具合って言われてもなあ。」

いち
「こっちは課題がアウト過ぎて困ってるんです。」

むーさん
「そうそう。もうちょつとアドバイスもらわないと、このままじゃ私たちいつまでも卒業できないわ。」

くっちゃん
「卒業課題をクリア出来なかつたら、オレたちどうなるんだ?」

先生
「有り得ませんよ。強く望めば、必ず。」

むーさん
「強く望めば、ね。」

いち
「……人間だった頃の記憶をさ。」

先生
「はい。」

いち
「私たち、天使になるとき勝手に奪われたでしょ。」

先生
「丁重にお預かりしました。」

いち
「どうせまた手放すのに、どうして取り戻す必要があるの? それなら、取り戻す必要なんてなくない?」

2人
「確かに。」

先生
「………本当の課題は……。」

先生、言葉を飲み込む。

先生

「いえ、何でもありません。」

むーさん

「やだあ。気になるじゃない。」

いち

「そうだそうだ。」

くっちゃん

「先生として言うのが筋だろ。」

先生

「いい女というのには、物事をあれこれ詮索しないそうですね。」

むーさん

「みんな。深く聞くのはやめましょ。」

いち

「単純オカマ。」

くっちゃん

「単純オカマ。」

れいれい

「あ、先生。これ、黒縄先生に返しておいてください。」

と、人形を渡す。

先生

「……。ゼロゼロ、常々思っていましたけど、あなたってすごい勇氣ありますよね。」

れいれい

「エへ。」

先生

「褒めてません。全く、いいですか皆さん。一刻でも早く課題をクリアして、

くっちゃん

一刻でも早く、卒業してください。それが先生の望みです。」

先生

「一刻でも早く、校長を……。」

先生

「それはやめなさい。」

先生、人形を持ち退場。

3人、エンジェリングを頭から外し、自分の席に腰をおろす。くっちゃん、つ

まらなさそうに座る。

くっちゃん

「……本当の課題は……、あー、くそ。何なんだろうな。」

むーさん

「あら、私はもう、詮索する気はないけどね。」

くっちゃん

「いい女ぶるなよ単純オカマ。」

むーさん

「ひどい。」

れいれい

「本当の課題は。」

いち

「おう。」

れいれい

「……うーん、気になるね。」

いち

「ズコ。」

くっちゃん

「何だよちょっと期待したじゃねえか。」

れいれい
いち 「私にわかるわけないでしょ。バカだもん。」
「誇るな。」

むーさん、何かに気がついたように遠くに目を向ける。3人、その様子に気がついていない。

くっちゃん 「ま、とにかく作戦練ろうぜ。」
いち 「作戦？」
れいれい 「なんの？」
くっちゃん 「なんのってそりゃ、校長襲撃大作戦に決まってるだろ。」
いち 「諦めなよくっちゃん。この時点で既に敗北は決定してるんだよ。」
くっちゃん 「諦めたらそこで試合終了だろ！」
いち 「諦める前から試合は終了してんの！」

れいれい、むーさんの様子に気がつく。

れいれい 「むーさん、どうしたの？」
いち 「むーさん？」
くっちゃん 「どうしたオカマ。」
むーさん 「ねえ、何か聞こえない？」
くっちゃん 「何が。」
むーさん 「ほら。」

3人、耳を澄ますが、何も聞こえない。

いち 「聞こえる？」
れいれい 「いや……。」「
くっちゃん 「何も聞こえないけど。」
むーさん 「やめてよお。こわいじゃない。」
いち 「その動きが怖い。」
むーさん 「ほら、赤ちゃんの。」
いち 「赤ちゃん？」
むーさん 「赤ちゃんの、泣き声が……。」「

6 朱澄ー過去。
とある倉庫。

鉄パイプなどが散乱している。

体育座りで怯えている朱澄(むーさん)の近くに、イライラした男(誘拐犯)が座っている。

男、携帯を操作し「クソツ」など声をあげている。

誘拐犯 「遅えんだよ、ぶっ殺しちまうぞ、くそ。」

朱澄 「おじさん。」

誘拐犯 「あ？」

朱澄 「わた、僕、トイレ。」

誘拐犯 「我慢しろ。漏らしたら殺すぞ。」

朱澄 「でも……。」

誘拐犯 「うるせえ殺されてえのか！」

朱澄、黙る。

誘拐犯の携帯に着信。

誘拐犯 「クズが遅えんだよ。どうだ、金はまとまったか。……は？ 寝ぼけたこと言
ってんじゃねえぞ、ガキぶっ殺されてえのか。あ？……ツチ、オレは優しい
からな、一瞬だけだぞ。(朱澄に)ガキ、何か喋れ。」

朱澄 「え、あ、あの。」

朱澄母声 「朱澄！ 朱澄！ 無事なの！？」

朱澄 「お母さん。お母さん。」

朱澄母声 「ごめんね。ごめんね朱澄。朱澄本当にごめんね」

誘拐犯 「謝る時間があるなら金用意するんだな。いいか、あと30分だ。……次
そんな言い訳したらガキの命はねえぞ。いいか、ガキ返してほしかったらと
っとと金え用意しろこのクズが！(電話を切る)」

朱澄 「お母さん。お母さん。」

誘拐犯 「うるせえ！ 黙ってろ！」

朱澄 「お母さん。」

誘拐犯 「あー、くそ、うるせえっていつてんだろうが！(頬を殴る)」

朱澄 「(もつと泣く)」

誘拐犯 「あーあーあー、うるせえうるせえうるせえ！ くそ！」

朱澄 「(泣き続けている)」

誘拐犯 「くそ、こんな筈じゃなかったんだ。(朱澄に)お前がそんな女々しいカツコシ
てるから悪いんだよ。濱江の嬢ちゃんかつ拐うつもりがよお。何なんだよ
お前はよおお。」

朱澄 「泣き続けている」

誘拐犯 「貧乏だどよお。お前の為に用意できる金なんてねえんだよお。かわいいそうだなあ、お前なあ。」

朱澄 「泣き続けている」

誘拐犯 「あーあーあー、うるせえ、うるせえ。うるせえって言うてんだろうがよおお。お。」

誘拐犯、ナイフを振りかざす。

朱澄 「泣き声」

7 教室。

れいれい・くつつん・いちの3人が席に座り話している。

黒縄が教室に入ってくる。

黒縄 「衆合の小鬼ども。」

いち 「げええええ。黒縄先生。」

黒縄 「躰のなっていない小鬼だな。お勉強の時間だぞ。」

れいれい 「え、なんで黒縄先生が？」

黒縄 「あの西洋かぶれが校長と面談中だからだ。この黒縄の足労に感謝するんだな。」

れいれい 「西洋。」

くつつん 「かぶれ？」

いち 「先生のことですか？」

黒縄 「この学校でお前たち小鬼のことを天使などとほざく西洋かぶれは衆合以外にいないだろう。あいつのメルヘンにはほどほど呆れる。」

れいれい 「(どこからか日本人形を取り出し)人形。」

黒縄 「マリアンヌ！(と、人形を取り上げる)」

れいれい 「西洋。」

くつつん 「かぶれ。」

いち 「(堪えきれなくなり笑う)」

黒縄 「ゼロゼロ、お前はお勉強が終わり次第この黒縄の有難いお説教だ。」

れいれい 「そんな殺生な。」

いち 「ちよっとお。人形借りたぐらいで心狭くないですかあ。」

黒縄 「わかったな。」

れいれい 「はい。」

いち 「そんな、れいれい。」

黒縄 「お前もだ。」

いち 「はい。」

黒縄 「ついでにお前も。」

くっちゃん 「いや何で!？」

黒縄、1人足りないことに気がつく。

黒縄 「ゼロロクはどうした。」

いち 「あ、今ちょっと。」

黒縄 「なるほど、喧嘩でもしたか。」

くっちゃん 「ちげーよ。」

黒縄 「口の聞き方に気を付けろ小鬼。」

れいれい 「いい女には1人になりたいときがあるんだって。マリアンヌ。」

黒縄 「勝手に話かけるな。」

くっちゃん 「何か悩んでんなら、話してくれてもいいのになあ。マリアンヌ。」

黒縄 「軽々しくマリアンヌの名を口にするな。なるほど、ゼロロクは課題の真っ最

中といったところか。」

いち 「え？」

黒縄 「お勉強はお前たち3人で行う。お遣いだ、気を引き締める。」

いち 「こんな日に限ってお遣いか。」

れいれい 「むーさんが一番得意なんだよね。」

くっちゃん 「オレちよっと呼んでくるわ。」

いち 「じゃあ先に用意しとくから。」

れいれい 「無理に引っ張ってくるのはやめてよね。本当に落ち込んでるみたいだから。」

くっちゃん 「わってるよ。」

くっちゃん教室から出ていく。

黒縄 「お遣いが得意とは珍しい小鬼もいたものだ。ゼロロクは案外武道派なのか。」

いち 「いや、説得の力がすごいんです。」

黒縄 「なんだやるじゃないか。」

れいれい 「特に男の人だとね。」

いち 「思い出しただけでぞっとする。」

れいれい 「私、女で良かった。」

いち 「私も。」

黒縄

「おい、なんだその説得は。」

2人、腕をさすり「ぞっとするわ」や「寒気が」などと呟きながら出ていく。

黒縄

「おい、どんな説得方法なんだ。」

黒縄、2人のあとを追いかけて教室から退場。

ガッコウの中庭。

植物は白かったり、色があっても薄かったり。

むーさん、落ち込んでいる様子でとぼとぼと歩いていたが、ふと立ち止まる。

むーさん

「ダメね。いい女は、過去に囚われないんだもんね。」

くっちゃんが中庭にやってくる。

むーさんを見つけて駆け寄る。

くっちゃん

「むーさん。」

むーさん

「くっちゃん。やだあ。迎えにきてくれたのね。感激。」

くっちゃん

「うるせえ。今からお遣いだとよ。」

むーさん

「あら。うんとおしゃれしていかなくちゃね、あなた。」

くっちゃん

「そうだなお前。って誰が。」

むーさん

「くっちゃんって口は悪いけどノリはいいわよねえ。」

くっちゃん

「全く嬉しくねえわ。ほら、行くぞオカマ。」

むーさん

「くっちゃん。」

くっちゃん

「おう。」

むーさん

「私、みんなのこと大好きよ。」

くっちゃん

「なんだよ気持ち悪いな。」

むーさん

「ひどい。」

くっちゃん

「そういうことは、みんなが揃ってるときに言えよな。」

むーさん

「そうね。」

くっちゃん

「はやく行くぞ。」

むーさん

「仕方ないわね、付き合っただげる。」

2人、歩きながら。

くっちゃん
「今日は黒縄先生が同伴だよ。」
むーさん
「きゃー！ 素敵！ 黒縄先生え。」

むーさん、駆け足で黒縄らの元へ向かう。
くっちゃん、呆れながらあとを追うが、途中で何かに気づいたように立ち止まり、振り返る。

むーさん声
「くっちゃん、どうしたのー？」

くっちゃん、だんだんと怯えたような顔になる。

くっちゃん
「声が……。」
むーさん声
「くっちゃん、はやくう」
くっちゃん
「声が……。」
むーさん声
「くっちゃん」
くっちゃん
「あいつの、声が。」

8
雨石ー過去。

とあるアパートの2階。
洗濯物がソファーに無造作にかかったり、シンクのなかに食器が放置されていたり、机の上にゴミが置きっぱなしだったりと部屋は散らかっている。明かりはついているようだが薄暗い。
赤ん坊の泣き声をしている。
雨石(くっちゃん)、ベビーベットで泣いている弟の奏多の側に立っている。

雨石
「泣くなよ。」
奏多
「(泣き声)」
雨石
「オレだって泣きたいよ。」

奏多、泣き続けている。
雨石、仕方なく奏多を抱き抱える。
奏多はなお泣き続けている。

雨石
「よしよーし」
奏多
「(泣き声)」
雨石
「よしよし」

奏多
雨石

〔泣き声〕

「泣くなよ。」

雨石、雨の音がしてベランダに目を向ける。
小雨が降りだしている。

雨石

「あ、お洗濯。」

雨石、奏多を抱えたままベランダに向かうが、途中で気がつき、ベビーベツトへと向かう。

ベビーベツトに奏多を寝かせようとして、止まる。
間。

雨の音がしている。

奏多は依然として泣いている。

雨石、奏多を抱え直す。

雨石

「よしよし。」

奏多

〔泣いている〕

雨石

「奏多はいいなあ。」

奏多

〔泣いている〕

雨石

「泣いてるだけなのにさ。お母さん、優しいもんな」

奏多

〔泣いている〕

雨石、ゆっくりベランダへ向かう。

雨の音がしている。

雨石、下を覗き込む。

奏多は泣き続けている。

雨石

「お前がくる前はさ……」

奏多

〔泣き続けている〕

雨石、ゆっくりと腕を伸ばし、両手で抱えた奏多を差し出す。

奏多は泣き続けている。

雨の音がしている。

雨石

「お前がいなくなったらさ……また……」

奏多

「泣き続けている」

買い物から帰ってきた雨石の母、登場。
部屋のなかを探すが、2人の姿はない。
ベランダにいる雨石に気がつく。

雨石

「なーんて……腕を引っ込めようとしながら」

雨石母

「かぶせて）ただいまー。洗濯ものありがと……」

雨石、動揺して固まる。

雨石母

「雨石、なにを……」

雨石

「あ、ちがう、オレ」

雨石、パニックになり、奏多をそのまま落としてしまう。

雨石

「あ」

雨石母

「きゃあああああああああ！ 雨石！ 奏多！ 奏多！」

雨石

「ちがう。ちがう！ ああああああ！」

雨石母

「奏多、奏多！ 奏多！」

雨石

「わあああああああ！」

雨石、その場から逃げ出すように、靴も履かずに部屋を飛び出す。

雨石母、慌ててベランダから下を覗き、雨石を追うようにして部屋を出る。

道路。

交通量が多い。

雨はかなり本格的に降っており、通行人はみな傘をさしている。

雨石を見てひそひそと話したり、逆に全く関心を持たずに通り過ぎていく人々。

雨石、息を切らしながら訳も分からず走っている。

立ち止まり、後ろを振り返る。

雨石

「ちがう、オレ、ちがう」

雨石、また走り出す。

明るくなる目の前。
クラクシヨンの音。
激しい衝突音。
強いブレーキの音。
雨の音が、している……。

9

ガツコウの職員室。
教室同様、真っ白な空間。
先生たちの机の上にある小物だけが色を主張している。
先生の机には金色のベルが7本ほど並び、黒縄の机にはお手製の日本人形のぬいぐるみが何体か並んでいる。
先生がうきうきとした顔でベルを磨いている。
磨いたベルを確認するように鳴らす。

先生

「あ。あー。んん」

ベルを鳴らす。

黒縄が職員室へと入ってくる。怪訝そうに先生を見つめる。

先生

「(高らかに)神のお言葉を。」

黒縄

「うるさいぞ衆合。」

先生

「あら、黒縄先生。」

黒縄、自分の席に腰をおろす。

先生

「先日はどうも、私の天使たちがお世話になりました。」

黒縄

「ん。なかなか手際の良い小鬼たちだ。」

先生

「ま、黒縄先生が珍しい。」

黒縄

「しかし躰は足りないようだ。この黒縄の小鬼たちを見習え」

先生

「私の天使に躰など必要ありませんわ」

黒縄

「ほう。ま、もうすぐ卒業だ。今さら何も言うまい。」

先生

「既に結構言ってますけど。」

黒縄

「どうだ。順調そうか。」

先生

「どうでしょう。」

黒縄

「把握していないのか。」

先生

「放任主義なもので。」

黒縄 「飼い主としては無責任極まりない言葉だな。」

先生 「飼うだなんて。あの子達は人間ですよ、黒縄先生。」

黒縄 「あくまで元だ。」

先生 「そうですね。今は私の天使たち。」

黒縄、呆れたように先生を見る。

黒縄 「お前は、ヤバイ。」

先生 「あら、黒縄先生。ヤバイなんてヤングですこと。」

黒縄 「その頭のなかに広がる花畑で一度ピクニックでもしてみたいものだ。」

先生 「おすすめ出来ませんわ。虫がたくさんいますから。もううじゃうじゃ。」

黒縄 「気持ち悪いことを想像させるな。」

いちが先生を呼びに職員室へやってくる。

先生を見つけ近づこうとするが、黒縄に気付き苦い顔で身を潜める。

先生 「気持ち悪いだなんて、まあ。可愛らしい蝶々がうじゃうじゃと飛んでいるだけですよ。それはもううじゃうじゃと。」

黒縄 「連呼するな。」

先生 「あらあ、黒縄先生、虫がお嫌いでしたっけ。」

黒縄 「フン。」

先生 「あ、ゴキブリ。」

黒縄 「ひいひい。」

先生 「嘘です。」

黒縄 「貴様！」

先生 「黒縄先生って案外臆病でいらっしやいますわ」

黒縄 「小鬼が小鬼なら教師も教師だ。嘆かわしいほど躰がなっていない」

先生 「そうですね。すみません、少しおふざけが過ぎました」

黒縄 「そのようだな。」

先生 「……臆病なのは。」

先生、寂しそうに微笑む。

先生 「私もですね。」

黒縄 「……。ああ。」

先生 「否定してくれないんですね。」

黒縄 「本当だからな。」

先生 「まあ。」

黒縄 「この黒縄も、お前も、永遠に臆病者だ。」

先生 「ええ。本当に。」

黒縄 「無事に全員卒業できるといいな。」

先生 「きつと大丈夫ですよ。私の天使たちは、臆病なんかじゃありませんもの。」

黒縄 「そうか。ならば、最後までしっかり導いてやれよ、西洋かぶれ。」

先生 「ええ。……西洋かぶれ。」

黒縄 「何だ。文句でもあるのか。」

先生 「まさか。ああ、そう言えば、確かマリアンヌさんでしたっけ。お元気にされていますか？」

黒縄、固まる。

先生、黒縄の顔を見つめ。

先生 「オホホホホホ。」

黒縄 「ハハハハハハハ。あの小鬼たちか。」

先生 「西洋かぶれ同士、今後とも宜しく願いますね、黒縄先生。」

黒縄 「誰が。」

先生 「(たった今来たかのように)先生。」

先生 「イチゼロ。」

いち、チラリと黒縄を見る。

黒縄 「おっと、この黒縄としたことが。野暮用を忘れていた。」

黒縄、職員室を出ていこうと席を立つ。

いち 「マリアンヌによろしくね。」

黒縄 「気安く呼ぶな！」

黒縄、職員室から退場。

先生 「どうしたのですか。」

いち 「あ、実は。」

先生 「先生、なんだか嫌な予感が。」

いち 「まあ、そのね。さっきまでマリアンヌと一緒に遊んでたんですけど。」
先生 「また勝手に。」
いち 「マリアンヌが川に流されちゃいました！」
先生 「何故!？」
黒縄声 「マリアンヌく〜く〜!」

職員室の外で会話を聞いていた黒縄、ドタバタと走り去っていく。

いち 「いや、まだ、頑張れば何とか。落ちたの浅瀬なんで。今れいれい達が全力で追跡中です。」
先生 「少しは睨けた方が良かったのかしら。」
いち 「え?」
先生 「いいえ。イチゼロ、河原は遊び場ではありません。これで352回目です。」
いち 「人形を流したのは1回目です。」
先生 「そういうことじゃありません。そもそも何をどうしたら流れるんですか。」
いち 「くっちゃんが。」
先生 「ゼロキュウは黒縄先生に恨みでも?」
いち 「違うんです。急に。」
先生 「急に?」
いち 「……腕のなかの人形に、怯えたような顔になって。」
先生 「……。」
いち 「叫びながら、人形を投げたの。」
先生 「そうでしたか。」

先生、立ち上がる。

先生 「仕方のない天使たちですね。人形を保護して、乾かして、あと傷があったら誤魔化して。黒縄先生と一緒に謝りに行きましょう。」
いち 「先生。」
先生 「当然でしょう、先生ですから。」
いち 「一生ついていきます。黒縄先生相手に、一緒に怒られてくれるなんて。」
先生 「何を言ってるんです。怒られるのはあなた達だけですよ。」
いち 「前言撤回」

先生、職員室の外へと向かう。

いち、先生のうしろを追いかけるが、途中で立ち止まる。

何かを見つけたのか、とある一点を見つめている。
先生、いちが着いてきていないことに気がつき、引き返してくる。

先生
いち 「イチゼロ、何をしていますか。」
「泣いてる……。」

先生、何かを理解し、いちと同じ方向を見つめる。

先生
いち 「イチゼロ、何が、泣いているんですか。」
先生 「赤ちゃんの……。」
「……。」
「これは、そう、産声だわ。」

10

一祈留ー過去。
とある病院の中庭、昼。
病服の人間、看護婦など、人がちらほらと歩いたり座ったりしている。
一祈留(いち)、母親を待ってベンチに座っている。
良いことがあったのか楽しそうな表情。
膝の上に大事そうに袋を持っている。
白衣姿で一祈留母が登場。

一祈留母 「一祈留、お待ちせ。」
一祈留 「お母さん。」
一祈留母 「お昼ごはんは。」
一祈留 「ちゃんと食べたよ。お母さんは？」
一祈留母 「ちゃんと食べたよ。それは？」
一祈留 「お手伝いさんと一緒に作ったんだよ。」
一祈留母 「天使の飾りね。上手だわ。」
一祈留 「いっぱい作ったから、病院のクリスマスツリーにも飾ってくれる？」
一祈留母 「もちろん。あとで飾っておくわ。」
一祈留 「家のツリーには、お母さん一緒に飾ろうね。」
一祈留母 「帰ったら飾りましょうね。」
一祈留 「うん。」
一祈留母 「そういえば一祈留、病院に来るまでに何か見なかった？」
一祈留 「何か？」
一祈留母 「すっごく大きなものとか。」

一 祈留 「あつ。でっかいクリスマスツリー！ の、半分！」
一 祈留母 「もうすぐ完成するんですって。一緒に見に行こうね。」
一 祈留 「うん。一祈留、天使さんの飾りいっぱいつくって持ってきてね！」
一 祈留母 「飾ってくれるかなあ。」
一 祈留 「ねえ、お母さん。天使さんって本当にいるの？」
一 祈留母 「もちろん。」
一 祈留 「お母さんはみたことある？」
一 祈留母 「もちろん。いつも母さんの側にいるのよ。」
一 祈留 「えっ、そうなの？」

一 祈留、辺りを見渡す。

一 祈留 「一祈留のことも見てる？」
一 祈留母 「そうね。悪いことも良いことも、全部見てるわね。」
一 祈留 「一祈留が悪いことしてたら、天使さん、サンタさんに言う？」
一 祈留母 「言っちゃうかも。」
一 祈留 「一祈留、良いこといっぱいしてるよ。」
一 祈留母 「一祈留はエンジェリングが欲しいんだっけ。」
一 祈留 「うん。みんなもサンタさんをお願いするんだって。それでね、みんなでエンジェルごっこする約束したの。」
一 祈留母 「パーティーに来るお友達？」
一 祈留 「うん。サンタさんからのプレゼント持ってきてみんなでするの。」
一 祈留母 「そう。」
一 祈留 「パーティーにね、朱澄ちゃんも来てほしいの。」
一 祈留母 「え？」
一 祈留 「でもね、電話しても繋がらないの。」
一 祈留母 「……母さんが、電話して聞いてみるわね。」
一 祈留 「うん。」
一 祈留母 「来てくれるといいわね。」
一 祈留 「うん。」
看護師声 「あ、濱江先生。すみません。」
一 祈留母 「はい。ごめんね一祈留。」
一 祈留 「お仕事頑張ってるね。」

一 祈留、お母さんを見送り手を振る。

一 祈留母、手を振り返しながら病院内へ。

一祈留、母親を見送ってから、少しだけ寂しそうに病院を出る。
帰り道。

一祈留、登場。

工事途中のクリスマスツリーを向こうに見つけ、立ち止まり見上げる。

天使の飾りが入った袋を見つめ微笑む。

通行人のおじさんが一祈留の横を通りすぎる。

一祈留も歩きだそうとするが、何かに気付き、立ち止まる。

一祈留 「おじちゃん。」

おじさん 「何だい、お嬢ちゃん。」

一祈留 「あれ、なんか変だよ。」

おじさん 「あれ？」

おじさん、空中でぶら下がっている鉄鋼の揺れが異常に大きいことに気がつく。

おじさん 「ありゃあ大変だ。」

一祈留、その鉄鋼の下を通る人を見つける。

一祈留 「ああ！ ダメ！」

一祈留、天使の飾りが入った袋を手放し、その通行人の元へと駆け出す。
背中を押そうと手を伸ばす。

おじさん 「お嬢ちゃん！」

悲鳴。

鉄鋼の落ちる音が響き渡る。

11

教室。

くっちゃんが走って教室に入ってくる。頭にエンジェリングを着けた、3人が追いかけて登場。

むーさん
れいれい

「もう逃げられないわよメチャクチャワルイーノ！」
「神妙(アクセントが変)にお縄につけえ！」

くっちゃん

いち

むーさん

「神妙な。」

「正すな。」

「さあ、行くわよエンジェルズ。今こそエンジェリングの力を見せつけるのよ〜！」

3人、「エンジェル〜！」などと声をあわせ、くっちゃんへ向かいビームを繰り出す素振り。

ワルイーノ、「ぐわあ〜！」など声をあげ、苦しそうにもがき倒れる。

れいれい

むーさん

いち

れいれい

むーさん

いち

れいれい

くっちゃん

いち

むーさん

れいれい

くっちゃん

いち

れいれい

いち

れいれい

むーさん

れいれい

いち

くっちゃん

むーさん

れいれい

いち

れいれい

むーさん

くっちゃん

「かくして、美少女天使れいれい」

「むーさん」

「いち」

「の3人によって、世界の平和は守られたのである！ 完！」

「終わったわねえ。」

「そうだね。」

「終わっちゃったね。」

「くそお。結局ワルイーノは倒されるってわけか。」

「愛着芽生えてるじゃん。」

「あああ、当たり前でしょ。正義は必ず勝つのよ。」

「悪は正義によって滅される運命なのだ。」

「ま、そうだよな。そうなるわな。」

「でも。」

「でも？」

「私が好きだったアニメはさ。悪役も、なんだか憎めなかったりしたんだよね。」

「えっ、いいなあ。アニメなんていつ見たの？」

「れいれい。」

「え？……あ。」

「もうすぐ卒業だね。」

「おう。」

「やだあ。考えないようにしてたのに。」

「天使ごっこ終わっちゃったし、次何しよっか。」

「そうだねえ。れいれいは何がしたい？」

「みんなと遊べるなら何でもいいよ。」

「全く答えになってないわね。」

「じゃあ、河原に行つて先生達の手伝いでもするか。今まで色々迷惑かけちゃったしな。」

いち
くつちん
いち
れいれい
くつちん
むーさん
くつちん
いち
くつちん
むーさん
れいれい
くつちん
いち
くつちん
むーさん
れいれい
くつちん
いち
くつちん
むーさん
れいれい
くつちん
いち
くつちん
むーさん
れいれい
くつちん
いち
くつちん
むーさん
れいれい
くつちん
いち
くつちん
むーさん
れいれい

「手伝いって。」

「そりゃあ、河原で手伝いと言ったら。」

「止めてよ！ 私は誰かのトラウマになってなりたくない！」

「私も反対。誰かさんと違って子供泣かせるのは趣味じゃないから。」

「別にオレも趣味じゃねえわ。」

「でも河原に行くのはいいわね。私、会いたいボーヤがいるの。ウフ。」

「妙な寒気が。」

「この際だからむーさんの為を想って言うけど、相手は会いたくないと思うんだな……。」

「ウソよお。だってボーヤ、大人しく私の腕に抱かれてるわよ。」

「むーさん、それ、大人しいんじゃない。怯えてるだけや。」

「そんな。」

「酷な真実だな。」

「くつちん。」

「離れろ。」

「でも河原には行きたいね。あの子いるかな。」

「あの子？」

「ほら、私がお掃除で河原に行ったとき……。」

「ああ、蓋を探してる。」

「そう、蓋の子。」

「行きましようよ。」

「黒縄先生がいないならいいぜ。」

「あっ、今日いたわ。」

「ダメだ。」

「あれから私達、目の敵にされてるものね……。あの目も素敵。」

「オカマって強。」

「母性故かしら。」

「抜かせ。」

「いつか逆襲したいんだけど、やっぱ無理かなあ。」

「したじゃん。」

「いや、あれはマリアンヌに申し訳ないことをしたただだよ。」

「そうねえ。ごめんね、マリアンヌ。」

「悪かったな、マリアンヌ。」

「先生が器用で助かったよね。縫い目も全然わかんなくて。」

「あの針捌き、確実にプロね。」

「（人形を取り出し）これは誰だと思う？」

3人、驚きと興奮と呆れを見せて。

むーさん
「れいれーい！」

いち
「肝据わりすぎ！」

むーさん
「警備強化されてたでしょ、どうやって取ってきたのよ。」

くっちゃん
「そりゃお前、やっぱ天井に貼り付いて。」

れいれい
「貸してくれたの。」

くっちゃん
「誰が。」

れいれい
「黒縄先生。」

いち
「……うそ？」

れいれい
「ホント。」

むーさん
「どうしちゃったのかしら。」

れいれい
「(黒縄の真似をして)お前たち小鬼の手際の良さだけは認め、卒業祝いにこのメテンプシコージとのお遊びを許可してやろう。この黒縄の寛大な心に感謝するんだな。」

くっちゃん
「へえ。教師らしいところあるじゃん。」

れいれい
「無傷で返さなければこの世の果てまで恨む。」

くっちゃん
「なかった。」

いち
「祝い……。やっぱめでたい、のかな。」

むーさん
「当たり前じゃない。いやあん、すっかり黒縄先生の虜だわ。」

いち、黙って考え込んでいるが、誰も気づかない。

くっちゃん
「せっかくだし遊んでやろうぜ。宜しくなメテメテコジキ。」

むーさん
「名前の覚え方酷いわね!？」

れいれい
「メテンプシコージである！」

むーさん
「あなたのご主人様の虜、むーさんよお。」

くっちゃん
「うっせーオカマだな。」

むーさん
「うふ。ヤキモチね。」

くっちゃん
「吐き気が。」

れいれい
「バケツは外である！」

くっちゃん
「吐かねえよ。」

むーさん、いちの様子に気がつく。

むーさん

「いち？」

騒いでいた、2人、続けて気がつく。

れいれい

「いち？」

くっちゃん

「おいおい、リストラされたサラリーマンみたいな顔してるぜ。」

れいれい

「例えが。」

むーさん

「くっちゃん、あんた無神経よ。いち、大丈夫？ 何か辛いの？」

この辺りで先生が教室に登場。遠くから4人の様子を見ている。

いち

「あのさ。」

むーさん

「ええ。」

いち

「もうすぐ、卒業じゃん。」

むーさん

「ええ。」

いち

「あのさ。」

むーさん

「……。」

いち

「ちよっと、怖くない？」

くっちゃん

「何が。」

いち

「私たち、天使じゃないじゃん。人間じゃん。」

むーさん

「今は天使よ。」

いち

「違うよ。記憶取り戻しちゃったんだもん。もう、天使でいられないじゃん。」

れいれい

「いち。」

いち

「また忘れるのよ。一祈留だったことも、今のいちも、みんなのことも全部忘

れるんだよ。」

むーさん

「大丈夫よ。落ち着いて。」

いち

「むーさんは怖くないの？ 自分を手放すんだよ。自分を殺すんだよ。」

むーさん

「あら、平気よ。みんなのこと忘れるのはとっても寂しいけど、私達、乗り越

えていかなくちゃいけないんだと思うわ。」

いち

「何それ。鬱陶しいのよ。いっつもむーさん、そうやってポジティブでさ。明

るく言えばどうかなるって思ってるの？」

むーさん

「そんなこと思ってないわ。いち、アンタがネガティブ過ぎるだけよ。」

いち

「むーさんが考えなしなだけじゃん。」

むーさん

「アンタねえ」

えいれい

「止めてよ！」

2人、れいれいを見る。

れいれい 「最後なんだよ。卒業したら、もう遊べなくなるんだよ。喧嘩なんかで終わりたくないよ。」

いち 「れいれい。」

れいれい 「みんなのこと大好きだよ。お別れなんかしたくないよ。でもいつか卒業しなきゃダメなんだよ。天使じゃないもん。私達人間だもん。お別れしなくちゃいけないんだよお。」

れいれい、泣きながら教室を出ていく。

むーさん、少し遅れてれいれいを追いかける。

残った2人。

沈黙が流れる。

いち 「私最低だな。」

くっちゃん 「お前さ。」

いち 「うん。」

くっちゃん 「無駄に頭良いんだよ。一周回ってもはやバカ」

いち 「勝手に一周回さないでよ。」

くっちゃん 「自分を殺すもクソもねえだろ。オレ達とっくに死んでんだぜって話」

いち、くっちゃんを見る。

くっちゃん 「だろ。」

いち 「あんたってホント無神経だわ。」

くっちゃん 「まあな。」

いち 「褒めてんのよ。」

くっちゃん 「当然。」

いち、教室から出ていこうとする。

くっちゃん 「どこ行くんだよお。」

いち 「決まってるでしょ。」

いち、出ていく。

くっちゃん

「何だよつれねえな。オレも。」

くっちゃん、駆け足で教室から退場。

先生、2人の出ていった方向を見つめている。

先生

「私の天使たちは強い子ですよ、校長。」

先生、4人を追いかける。

12

黄泉罅りの道―夜明け前。

下は崖になっている一本道。

先は見えないくらい遠く、長い。

先頭を歩く先生、立ち止まって4人を振り返る。

先生、4人の顔を見つめる。

先生

「旅立つあなた達に、校長からお言葉を預かっています。」

いち

「最後までらい直接言ってほしいよね。」

むーさん

「裁判で忙しいのよ。」

くっちゃん

「おう、並べ並べ。」

先生

「(どこからかベルを取り出し鳴らす)神のお言葉を！」

4人

「拝聴！」

先生

「今までの勤め、まことにご苦労であった。校長である！」

れいれい

「生徒である！」

くっちゃん

「黙って聞け。」

先生

「勇気ある子供たちよ。お前たちの未来は、誰にも保障されるものではない。

お前たち自身が誇りを持って生き、誇りを持ってその命を輝かせることを、心より望もう。以上。校長であった！」

4人

「生徒であった！」

先生

「卒業、本当におめでとう。」

先生、向こうを見つめる。

先生

「私はこの先にはいけません。ここから先は、あなたたちの力で進むのよ。」

いち

「先生。」

先生

「はい。」

いち

「先生は。」

先生 「見守っていますよ。ずっと。」

れいれい 「先生。」

先生 「衆合クラス鬼籍番号1570300。」

れいれい 「はい。」

先生 「1570306。」

むーさん 「はい。」

先生 「1570309。」

くっちゃん 「はい。」

先生 「1570310。」

いち 「はい。」

先生 「私の天使たち。」

4人 「はい。」

先生 「あなたたちなら絶対、大丈夫です。」

4人 「はい、先生。」

先生、向こうの空を見る。

先生 「ああ。」

4人、同じ方向へと顔を向ける。

先生 「日の出だわ。」

空、少しずつ明るくなってくる。

じっと、空を見上げている5人。

どこか遠くから産声が聞こえてくる。

小さく聞こえていた産声がだんだんと消える。

— 始 —